刊行にあたって

昨年9月、夏季休暇を利用して学生たちと一緒に四国の香川県の男性介護者の会を訪ねた。その名も「さぬき男介護友の会」(代表・九十九芳明氏)。介護する男性の介護実態とその会の活動の実際を伺おうと現地に足を運んでみた。介護と仕事の両立の困難を訴える人、認知症の妻と暮らしているがこの会に入って「ひとりじゃないんだ」と気持ちが楽になったと語る人、妻の介護、親の介護だけでなく叔父叔母の介護を担う男性もいた。ひと通り自己紹介が終わったころオブザーバーで参加していた女性が男性の介護者の特徴について次のように話してくれた。SOSの発信が苦手、男性は逃げない、仕事のように介護しようとする、子育ての経験がない、被介護者を自分と一体のように思う人がいる、というのだ。「男らしい」多くの介護者との交流があったからこそ感じた男性介護者像なのだろう。「一生懸命だけど心配な介護者」という指摘に共感しながら耳を傾けた。

この会は4年前の2001年4月に発足して会員は現在10名余りというが、同様の会は今全国に100か所以上にまで広がっている。みんな大人数ではなく小さな集まりだ。私が事務局長を務める「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」が発足したのが2009年3月だが、それ以降に発足した会や集いがほとんどを占めている。イクメンに倣って自らを「ケアメン」と称する会や集いだって少なくない。

会の歴史が新しいだけに、その運営かくあるべしという確たる知見もこの社会に蓄積されているわけでもない。会員の募集や会や集いの周知・広報、定例化、会場の確保、例会の運営やそこでのプログラムの選択、事務局機能や支援者・スタッフの確保、入退会など入れ替わりの激しい会員・参加者の状況把握や管理、行政や社協等との連絡、介護環境の改善のための社会啓発等々その課題は数え上げたらキリがない。介護の仲間づくりというささやかな願いもこうした課題を前にすれば一声一歩を踏み出す気力さえも萎えてしまいかねない難題かもしれない。しかし、それでもなお、全国各地では介護する男性たちの産声が今も上がっているというのだ。難しい課題をも乗り越え得るような希望の光がそこに宿っているからではないか。小さいが、無限の宇宙に連なる可能性

を実感するからではないか。

本書は、こうした問題意識を持って 2015 年 3 月 7 日に開催された、「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」と人間科学研究所（文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」の一環として）の共催で開催された男性介護シンポジウム「ケアメン・コミュニティのマネジメント」の記録である。介護する男性たちの会や集いで醸成される立場を同じくする者たちの共感やそこに吸引される支援する友人・知人・援助職との連帯の拡がり、そして介護する側される側の環境改善に向かう運動の萌芽等々を「ケアメン・コミュニティ」と措定してみた。短い時間での意見交換だったが、そこでは辛さ暗さだけが際立つようなこの社会の介護に、灯りを灯すような胸を打つエピソードが幾つも幾つも語られた。各地のケアメン･コミュニティで日々生成されているこうしたエピソードを拾い集め、私たちの共有の財産にしていくこと、蓄積していくボックスを構築していくこと、このことを痛感させられたシンポジウムともなった。

最後に、基調のご講演を頂いた太田貞二氏と、遠方より貴重な実践報告を頂いた井口希代子氏、井出里美氏、戎世伊次氏、堀本平氏、そして本誌への掲載を快く許可頂いた男性介護者と支援者の全国ネットワーク、そして長きにわたって変わらぬご支援を頂いている公益財団法人キリン福祉財団に対し、心から感謝申し上げたい。

2016 年 2 月 20 日

立命館大学　津止正敏